

国分良成編

『中国の統治能力 政治・経済・
外交の相互連関分析 』

慶應義塾大学出版会 2006年 368ページ

えびはら つよし
海老原 毅

近年中国の台頭が叫ばれているが、その統治能力をいかに捉えればよいか。これは国際社会において関心の高い問いであるというだけでなく、わが国にとっては、隣国ゆえに客観的に判断しにくい面があるものの、各層での交流が緊密化している今日、現実的に認識しておくべき焦点でもある。一方、中国でも、2004年秋に開催された中国共産党中央委員会全体会議の決定に「執政能力」という語が盛り込まれたことに象徴されるように、変化が激しい内外環境のなかで、政治腐敗などの問題や矛盾が絶えない共産党政権の統治能力が問われている。こうした背景の下、本書では「中国が各分野で抱える諸問題とその解決へ向けての取り組みを観察することにより、全体としての現段階の中国像を提供すること」をめざし、多様な分野についての分析が展開されている。

本書は、慶應義塾大学グローバルセキュリティ研究所に組織されたプロジェクトチームによる共同研究の成果である。26人の多彩なメンバーで構成されたことから、総論のほか、3つの部分、合計26章に及ぶ著作となっている。各章の分析対象は以下のとおりである。

まず9章からなる政治分析では、中国共産党、政治社会意識、中央・地方関係、全国人民代表大会、官僚組織、人民解放軍と党軍関係、都市政治、農村政治、少数民族である。

次に計9章の経済分析では、体制移行、人民元、不良債権、貿易・投資、民営化、リスク要因、農業・農村・農民、物流、エネルギーである。

さらに計8章立ての外交分析では、対外戦略とアメリカ、安全保障、対日外交、台湾問題、対朝鮮半

島外交、東アジア協力、対ASEAN外交、上海協力機構である。

このように広範な分野を収めた本書の主な特徴として、以下の4点を指摘することができる。

第1に、各分野を専門とする研究者または実務者によって、現状分析と課題が簡明に記述されていることである。中国の主要分野に関する最新の状況が平易に述べられるとともに、各章末に要旨と結論が設けられていることから、中国を専門に学んでいない読者が理解するのも困難ではないと思われる。

第2に、大半の章では、現状分析の結果から当該分野における統治能力の強弱やそれを左右する要素が明示されていることである。この点は特に政治分析の章に顕著であり、それは統治能力という概念が政治分野に直接的な関わりをもつ点に起因する。

第3に、多くの章での分析には、江沢民政権と胡錦濤政権の政策を対比的に論じた部分がみられることである。これは、当該プロジェクトの取り組みが、胡錦濤政権への移行に伴う政策の変化を指摘できるようになった時期に行われたことによる。読者は、本書を通して、この政権移行による政策の変化が多分野に及ぶことを具体的に確認できるだろう。

そして第4に、本書の副題である政治・経済・外交の相互連関分析を試みていることである。端的には、中国の究極目標である政治体制の維持には経済成長の確保が不可欠であり、対外依存度の高い経済発展の維持には平和な国際環境が必要なため、対外協調路線をとらざるをえない、という総論での総括がある。また、例えば「民族政策における政治・経済・外交・文化の相互連携」を析出した章もある。

市場経済化とグローバル化が急速に進む中国では、政治・経済・外交の3分野で相互作用が強まる傾向がみられるため、分析者には今後いっそうこれに見合った視角をもつことが求められよう。特に、その必要性を提起した点と、統治能力の解明に本格的に取り組んだ点で、本書の貢献を高く評価できる。だが、相互連関分析には改善の余地もみられ、さらに精緻化された分析が続けられることを期待したい。

(富山商船高等専門学校講師)